紅き伝説

レッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅き伝説

【Ｎコード】
Ｎ０１６１Ｚ

【作者名】
レッド

【あらすじ】
火災現場で死ぬ寸前に少女と出会い異世界へ

しかし能力もよくワラカナイ主人公！
どうなるの～

そして運命の女神に愛される主人公の運命は！

プロローグ

俺の名前は高橋　俊。年は２３才

さていまの状態を説明しょう。
高卒と同時に消防士になり何度目かのビルの火災現場。
別に危険な現場ではなかった。慣れたものだった。

命綱を付け、先輩と一緒に逃げ遅れが居ないか屋内に侵入したまでは良かった。
火災は大したことなく煙が凄いだけだった。そのため排煙をするべく先輩と離れ窓を開けに行ったのが思えば俺の運の尽き。
いや始まりか……

先輩と離れ排煙をするべく窓を開けに行ったらまだ確認していない部屋を発見。
逃げ遅れが居ないか中を開けてみる。

部屋を探しても人は居ないか…窓も無いし部屋を出ようとして俺は目を疑った。

扉が無い！

おかしい、それにさっきはうっすらだった煙が濃くなり周りが見えない！！！！！

なぜだ！やばい！

壁伝いに歩くも出口は見つからない……

ジリリリリリリリ！！！！

しまった呼吸器の残量があと僅かだ！！

呼吸器が渋くなってきた……

もうダメか……思えばいい人生だったのだろうか。

そういえば俺の周りは何時も大変だったな……

学生時代は、俺は成績は普通より上だったのに何時もクラスで悪く、教師から怒られ消防学校でも同じ

他にもいろいろあったがもう呼吸器がやばいな……

そんな時俺の前に花びらが

「サ……ク…ラ…？」

何でここに？

そして目の前に1人の女の子

いや少女か……

さっきは居ないかったのになぜ？

少女「生きたい？」

ああ……幻か……

少女「生きたい？」

もうやばいな呼吸器の計器も０を指している。息もできない。

まぁ幻にこんなの言っても仕方ないかけど

「あぁ生きたい、そして知らない世界を旅、いや冒険してみたかったよ」

そして、俺の意識は闇に落ちた……

1話（前書き）

ウ〜ン

1話

気づくとそこは先の見えない暗闇だった……

「あれ？俺、死んだはずだよな？」

「いえ、まだ死んでおりません。」

！！！？

突然の声に後ろを振り返ると先ほどの少女が立っていた。
いや美少女かいままで見たことない美少女だよ。

「あなたはまだ死んでおりません。あの時あなたは偶然にも神の領域に足を踏み入れてしまいました。」

「神の領域？あの扉が」

「えぇそうです。本来なら入れないのにあなたは入ってしまった。それは世界のバランスを崩してしまうと言うこと、なのであなたは今この場所にいます。」

「もとの場所に戻れないのか？」

「不可能です。あの世界でのあなたは死にました。そして、神の領域に入ったあなたには別な世界に異世界に行ってもらいます。それが世界のバランスを保つためです。」

「はぁ、バランスね……」

「そうバランスです。しかし、そのまま　異世界に行くのはあまりに不憫だと神々が判断いたしました。」

「はぁ」

「そこでこれです」

少女はいつの間にか白い箱を突き出した。いや、自慢気な顔で出されてもどうしろと……

「この中に異世界で役立であろう能力が入っております。」

「はぁ」

「一回引いて中のボールを一つお取りください。 」

言われるまま箱に手を入れ中のボールを出す。

黒いボールが出てきた。

「なるほど、やはりあなたは面白い人ですね。では異世界に行って貰います。」

「えっ！能力の説明は？」

体が白く粒子になっていく

「神々の決定では能力の説明は伝えてはならぬと決まっておりますので」

「えええ～っ！！」

異世界行って能力が分からなくてどうしろと

しかし、もう体のほとんどが無くなっている。

「じゃあ君の名前だけでも！」

「運命の女神と他の神々からは呼ばれております。ではまた。」

そうして俺は異世界に旅立った。

運命の女神「やはりあの人は面白い。神の領域に入り、そして異世界での能力も……うふっ初めて人を好きになりましたわ。高橋俊……面白い人……あの方なら私の夫に相応しいかも……

神と人、結婚してならないと言う決まりはないのだから……異世界に行っても私を楽しませてね俊…あと能力とは他に私からの餞別よ。」

そう言うと女神は一振りの刀を取り出した。

「さぁ、あなたはこれを使いこなせるかしら？」

そう言うと刀が光に包まれて消えた。

「さぁ行ってらっしゃい俊！力を付けて神の領域に達しなさい。私は応援してるわよ。」

運命の女神の独り言は闇に消えた……

2話（前書き）

ウ〜ン

2話

「知らない天井だ……って違う！！！天井無いし空だし！」

ふぅ～ボケはここまでで、夢ではないか……

しかし本当にここ異世界？

服も変わってるし……

これがさっき引いた能力か？いや服だし違うか。

先ほどの火災現場の防火衣の呼吸器フル装備とは変わって上が黒いTシャツ、したが黒いズボンにそして靴も黒い靴に変わっていた。

「黒尽くしですか……まぁ黒好きだし別にいいか……」

さて見る限り草原だしどうしよう……

いや違うか……遠くに街らしきものが見える。

まぁ取りあえず街に向かうか……

「うん？」

すると足元に刀が転がって居るのに気づく

「なんだこれ？いや刀か……しかしこれも黒いのね……」

何も無いよりましか……持っていくか。

こうして俺は街へ向かうのだった。

俊は刀を手に入れた。

「おぉ～遠目でもわかっていたが、やはり異世界？いや～中世ヨー

ロッパ的な感じだの～」

街の入り口で俊は改めて異世界にきたと感じていた。

「さて、普通に入れるのかね？」

そう問題はそこである全身黒づくめの俺が街に入れるのか？身分証明とかできませんけど……

「取りあえず行くか…」

変な所でポジティブな主人公であった。

街の入り口では案の定、門番らしき数名が検査を行っていた。

「次のもの！！」

門番に促され前に出る。

「身分証明書はあるか？」

やはりかたか…

「あははは……ありません。やっぱりダメでしょうかね……」

「なんだ？お前、身分証明書が無いか？
」

えぇいここは適当な嘘を

「えぇ、この街は初めてでして。実は田舎から出てきたばかりで……」

行けるか？

「まぁよい冒険者になりたいという田舎の若者がよく来るのでな……　では街に入る為に税金１００クールをを収めて貰う。」

あれ？大丈夫だった……

うん？お金？

やべー金ねー！！！！しかも１００クールってなに？

取りあえず服をガサゴソ……

うん？あれこんな袋あったけ？

取りあえず中を見てみる。

中にはよくわからないけど銅貨や銀貨が少し入っていた。

取りあえず前のおっさんが出していた銅貨を一枚だす。

「じ、じゃあこれで……」

「ウム！確かに。」

おぉ～合ってたみたいだ。

「では、ようこそリモーネの街へ。あとお前が冒険者になったら街に入る為の税金は無くなるぞ。良かったな坊主！」

ほ～そうなのか……いいな冒険者。

その後なんとか無事、街に入れた。

しかし本当になんかネットゲーみたいな世界だな。さっきの門でも刀を注意されなかったし……

それに、エルフぽい人や全身鎧の人、獣人？みたいな人がいる。帯剣してる人もちらほら

さてどうしよう……

さっきの門番のおっさんが言ってた冒険者になりに来る若者ね……

お金もあるにはあるけど無限じゃないし、あと銅貨９枚に銀貨か？が５枚だし……

えっと……銅貨１枚が１００クールだな。銀貨はその上だと考えてウ～ンどの位の金額がわからない。

とりあえず田舎から出てきた若者でもなれる冒険者になってみるか。

ってどこでなるの！！！！？

2時間後……

「やっと着いた…」

最初に人に聞けば良かった！

観光気分でぶらぶらしてたら迷っちゃった。テヘ！

まぁ迷ったおかげで貨幣の価値がわかったよ。買い物してる人をじっと人間観察してね。

まず銅貨これはさっき門番とのやり取りで１００クール

次に銅貨の下、これが半銅貨これが１０クール

半銅貨の下が雑貨、これは１クール

雑貨が１０枚で半銅貨にさらに１０枚で銅貨にさらに１０枚で銀貨になるらしい……あれ？半銀貨ってないの？？

謎だ……

ちなみに料理店や花屋とか色々なとこで人間観察したけど１クールは日本円で一円みたい……

現在の所持金５９００クール

微妙～

このままだと不味いよ～いざ冒険者に！！！

ガダン

冒険者になれると教えて貰った建物へ

酒場？みたいな所だな……おっ！受付嬢みたいな人いるあの人に聞くか！

「あの～すみません、冒険者になりたくてきたのですけども……。」

「ハイ！新規の冒険者の登録ですね。では名前をここにお願いいたします。」

おぉ～この世界の文字わからんよ！！！

「あの～文字が書けません。」

「ハイ、大丈夫ですよそういった人もいますので」

よかった……

「では私が書きますのでお名前を。」

「俊っています。」

「ハイ、わかりました。トシ様ですね。」

といいながら紙に文字を書いて行く……

うん？ローマ字？だよなおぉ～これなら俺書けるよ、よかったー英語とか苦手何だよー

「ではこのカードに血を一滴たらしてください。」

と受付嬢が手のひらサイズのカードとナイフ出してきた。

言われるままにナイフで血をぽちっとな。

カードが淡く光る。

「ハイ、これで登録完了です。それでは冒険者の説明をさせていただきます。まず、そのカードはギルドカードと言います。身分証明書となりますので無くさぬように、またギルドカードにはその人の所属するチームやその人の能力などの個人の情報が入っていますので。」

へぇ～と感じながらカードに目を落とす。

トシ
ギルドランクＦ
筋力Ｄ＋
耐久Ｄ－
俊敏Ｅ＋
魔力Ｆ＋

ほうほう…なるほどね。

「能力にもランクがあります。上はＡ＋から下がＦ－筋力でいいま

すと、大体の男性の方がＦ＋からＥ－ですね。一流の冒険者になりますとＤ－からＤ＋でしょうかＢまでいきますと英雄の域ですね。」

ふ～ん筋力高いな～

うん？これが神からの能力か？

「ギルドでのランクなのですけれども、クエストをクリアして昇任クエストをクリアなさいますと一つ上のランクに上がります。なお特例もございます。またクエストによっては失敗しますと、違約金が発生しますのでお気をつけください。」

「また二つ名などついたり、特殊職業や神や精霊加護がつく場合は、カード下や裏面に記載されます。」

へぇ～と話をあまり聞かずにカードを見る

！！！！！！！！！

なんだこれ

幸運Ｇ－

えっ……Ａ＋からＦ－までじゃないのなにこれ……

その後の受付嬢の話も聞かずに呆然とする俊だった……

表面

トシ

ギルドランクＦ

筋力Ｄ＋

耐久Ｄ－

俊敏Ｅ＋

魔力Ｆ＋

幸運Ｇ－

裏面

運命の女神の加護

2話（後書き）

ウン

3話

刀

または日本刀とも言う。耐久性を捨て切れ味に特化したものとでもいおうか。

さてギルドで登録したのだがいかせん金が無い！
その為クエストを受注したのだが……

「あ～宿屋代聞いてくるんだったー」

今回受注したクエストはゴブリンを3匹討伐だった。
ちなみにクエスト成功報酬は銀貨3枚の３０００クール

宿屋代不明

日が暮れる前にと飯も食わずに急いできたのだが……

肝心の宿屋代がわからん……
野宿はイヤだよ……

まぁなるようになるか…

さて今回のクエストのゴブリンだが、大体成人男性の身長の半分ぐらいで、緑色のモンスターらしい

。

駆け出しの冒険者が狩る一般的なモンスターで、亜種や希少種もいるらしい。

このモンスターを倒し、耳につけているピアスを剥ぎ取り、ギルドに持っていけばクエスト成功らしい……

らしい、らしいと曖昧なのは受付嬢の話を聞いてなかったから

「ハァ…」

なんだよ幸運Ｇ－って！！！

突き抜けてますけど！！！主に下に！

大丈夫なのこれ！

神から与えられた能力もわからんし、これだったら泣くぞ！ハァ、

とりあえず今は今晩の宿屋をとる為にゴブリン抹殺だ！

えっと北の森によくいるんだっけ？

冒険者ギルド受付

受付嬢「あの人大丈夫かしら……話をボーっとして聞いてなかったけど…間違っても1人で、北の森に行ってないわよね…森の入り口はまだ大丈夫でしょうけど、奥には熟練冒険者のチームでも気を抜けないオーガだっているのに…」

「ここが受付嬢のねーちゃんが言ってた森かな？」

歩くこと2時間、森についた。

ではゴブリンを探しますか……

拝啓

受付嬢のねーちゃんへ

ゴブリンって成人男性の身長の半分だよね……

いま俺の前に居るのなに？

明らかに身長3mありますけど……

なんか錆びた斧持ってますけど……

あと口から涎がボタボタと……

ヤバいんじゃないのこれ……あ～ちゃんと話聞いてるんだったー

と考えてるとモンスターが斧を振り下ろしてきた！

「うおっ！！」

なんとか避けたよ。

「クソ！ゴブリンの癖に……」

色々間違ってます。ゴブリンではなくオーガです。

俺も負けじと腰に差してある刀を抜く……

抜けない……

「あれ？」

そういえばまだ一度も抜いてない！！！

うおっ本当に抜けないよ～！

これしかないのに！神からの能力の切り札かもしれないのに！！！！

「あっ！無理だよこれ！！！」」

とりあえず逃げる！！！！しかし悲しいかな、

俺の俊敏能力はＥ＋

あの巨大ゴブリンも同じ位だよ……

えっ！要するに

「逃げれねー！！！！」

巨大ゴブリンと差は広がらず、縮まりもせず。

体力には自信があったが森の中では分が悪い！！！

まだ追って来るのかと、走りながら後ろを見ると……

「増えてるー！！！」

巨大ゴブリンが1匹から3匹に増殖！！！！

斧の2匹に棍棒1匹

なんと！ついてない！！！！

幸運Ｇ－は伊達じゃない！！！！！！

しかも疲れてきたよ。

俺詰んだか？

そんな走っている時目の前を桜の花びらが……

「サクラ？」

キィン！！！！

「うおっ！抜けたよ！」

サクラと呼んで刀が抜けた？
もしかして、これが神からの能力か？
この刀が名刀とかなのか！？
と考えながら急反転！

追いかけてきた巨大ゴブリン達は、急に獲物が反転したものだから、
３匹絡み合い倒れる。

「チャンス！！！」

一番手前に倒れている巨大ゴブリンの頭に刀で突きを喰らわせる。

「ウガーガガガ……」
と断末魔を上げてゴブリンが死ぬ……

グロイが慣れてない訳では無い！！！！

近くで起き上がりそうなゴブリンに切りかかる！！！！

あれ？刀握るとき右手上だっけ？
どうでもいい！！！

とりあえず目の前のゴブリンの腕を切り抜く！！！

切り抜けない……

なんだと……この刀切れ味悪いぞ

途中で止まっていた刀を無理矢理力押し腕を半分に斬ってやった。

流石に筋力Ｄ＋は伊達じゃないな…

「ウガー！！！」

あれ怒った？

あれもう１匹は？

と周りをみた瞬間

「ゴフッ！」

ゴブリンの棍棒で吹っ飛ばされる。

とっさに刀で防いだが力を殺せなかったらしい……

しかし俺の耐久はＤ－！

一流だぜ！ゴブリンの攻撃でやられるはず……

ダメそう…

腕と頭から血が……

それにさっき棍棒を防いだら刀にヒビが……

ヤバい！本能でわかっていて立とうとしても立てない……

体もヤバい、武器の刀も折れ欠け詰んだか……

刀を杖に立ち上がっろうとしたら俺の血が刀にべっとり…

カタ……カタカタ……カタカタカタカタカタカタ

なんだこれ刀が動き出したぞ！！！！

刀が淡くサクラ色に輝く。

なんと刀が治ってる！

しかも若干赤いぞいや紅いぞ！

しかしサクラ色に輝いて紅くなるなんぞこれ？

しかしゴブリンが空気を読んでくれたのはここまで2匹同時に雄叫びを上げて突っ込んできた。

刀は治っても体は治ってない…

避けれない……

刀を眼前に構え迎え撃とうとすると

目の前にまたサクラの花びらが……二枚ヒラヒラと

あっ！ゴブリンに当たった。
ズシャッ！！！！

なんとサクラの花びらが当たった所が斬れた！！！！1匹は倒れて、
もう1匹は膝をついている状態だ！

これなら……行ける！

痛む体を無理矢理動かし、膝をついているゴブリンに野球のフルスイングのごとく、刀を横から振るってやる。

グシャッと音を立て首と体が別れる。

もう1匹のほうは片腕が無くまだ立ていない。

立とうとしているゴブリンに先ほど同じ様に刀をフルスイングで入れてやる。

「グギギギ……」

と声にならない声を上げて倒れるゴブリン。

「ふぅ～やったか…しかしゴブリン強すぎ！俺もチーム組むか……」

と愚痴を零してクエストを成功させる為耳のピアスを剥いで行く主人公であった。

3話（後書き）

刀の花びらはブリーチの白哉の卍解イメージで……

うーん

4話（前書き）

ウン

4話

「やっと街についた。」

ゴブリンとの死闘から数時間、トシはやっと街に帰ってきていた。
ゴブリンからの攻撃を喰らい一時期は、立つのもつらかったがなんとか、歩くことは出来るまで回復した。
「打撲だったのかな」
攻撃された所からの血は止まり帰りにあった小川で血の汚れを落としてきた。

さて怪我は大したことないから目指すは冒険者ギルド。
そこでゴブリンのピアスを換金だ。そして宿屋に……

「宿屋代たりるかな……？」

まぁなるようになれだ！

「おぉ～夜は酒場も賑わってるな。」

ギルドに入り昼間は流行ってなかった酒場をみて素直な感想を上げる。

「まずは換金か……」

ギルド受付
「あら、トシ様クエストはどうでした？」

「あぁ…なんとかゴブリンを討伐したよ。しかしゴブリン強くない？あれ本当にFランクのクエスト？」

と言いながら受付のテーブルに剥ぎ取ったピアスを置く。

「あれ？あれれ？」

なんだ？受付嬢が焦ってるぞ。まさか俺間違った？「あの～トシ様。トシ様が倒した。ゴブリンのと言うのは……」

「えっ！３ｍ位の緑色のヤツだったよ」

「はぁ……なるほど、トシ様が倒したのはオーガですね。このピアスはオーガのピアスでトシ様の話から倒したモンスターはオーガでしょうね。」

「稀にいらっしれるのですよ。Ｆランクの方でも上位のランクのモンスターを倒される方が……（でも、チームを組んで無い方でオーガを倒すなんて……Ｄランクの熟練冒険者または、Ｂランクの一流の冒険者でも、気を抜けないモンスターなのに）」

「ハイ。ではこれが今回の報酬です。」

出て来たのは金貨３枚

「初めて金貨みた……」

「そうでしたか。銀貨１０枚で金貨１枚です。金貨１０枚で白金貨１枚になります。」

「へぇ～」

「あと、トシ様は規定モンスターを討伐しましたので、ギルドの特例によりギルドランクをＦからＤにさせていただきます。」

ランクが上がり報酬を受け取り、宿屋探しに

今度はちゃんと話を聞いてきたぞ！

えっと宿屋はギルド前と……

近いね…

宿屋に入りおばちゃんに、宿代３０００クール銀貨3枚を払う。

クエスト行かなくても大丈夫だったのね……

軽いショックを受けながら宿屋の食堂で食事をし、疲れの為かすぐ眠りについた。

ギルドカードもみずに……

ギルドカード表面

トシ

ギルドランクＤ

筋力Ｄ＋

耐久Ｄ－→Ｄ＋

俊敏Ｅ＋

魔力Ｆ＋

幸運Ｇ－

裏面

装備

刀…紅桜

加護…運命の女神の加護

4話（後書き）

ウ〜ン

5話（前書き）

うーん

5話

私の名前はリン。職業は戦士でチームの前衛を守っています。

でもいまチームの解散の危機なの……一緒にチームを組んでいた前衛の特殊スキル持ちの盗賊ちゃんがチームを抜けちゃったの……

あとは私以外に2人いるけど2人とも私と同じ女の子で、後衛の弓使いに回復系よりの魔法使いだけ……

私弱いし……他の2人も冒険者になったばかり……

だから前衛の人がチームに入ってくれたらな…

「知らない天井だ……」

目が覚める主人公……

「飯くってギルド行かないと……」

昨日の戦闘でチームに入っていた方が良いと感じたトシ……

さてチームに入りに行くのはいいがそんな装備で大丈夫か？

刀装備以外は普通の服装ですけど……

「あ～防具も買わないと……あとでいいか……」

そんな装備で大丈夫か？トシよ……

……冒険者ギルド……

女戦士「すみませ～ん誰が前衛のひとチームに入りませんか～」

シ～ン……

しかし昼間のギルドの酒場
人はちらほらいるが酔っ払いばかり……

「すま～せ～ん……」

荒くれ冒険者「へっへへぇ～オイ姉ちゃんよ！そんなにチーム募集してるなら俺のチームに入んねーかよ！姉ちゃんなら結構いくぜ～」

あから様に胸ばがりみて答える酔っ払い……

それもそのはず皮の鎧の上からでもはっきりわかる

乳……

乳……

あっ！やばい行ってたよやばいやばい…

そうギルドに入ったら巨乳の姉ちゃんがチームの募集をしていた巨乳の……

あまりに素晴らしいかったので人間観察をしてしまったよ……
……

女戦士「も～やめてくだい！」

荒くれ冒険者「なんだとこらっ！こっちが親切にしてやりやぁよ」

荒くれ冒険者さん酔っ払ってますねわかります……私も酔うと交番の前で立っしょんしたり、自衛隊の駐屯地の電柱で寝たりするのでわかります……

女戦士「だから～やめてくだい！」

おっといけないあのち、ゲフン！女の子を助け助けなければ…

まぁ酔っ払いを制するのは簡単だ後ろから殴ればよい…

女戦士「あ、ありがとうございます……あの～見たところ前衛の方に見えるのですが……チームに入ってらっしゃいます？」

トシ「はい？チームにはいってないよ、入るよりなにより昨日、冒険者になったばかりだしね。」

女戦士「えっ…じゃあ昨日のオーガを倒した新米冒険者って……」

トシ「あぁ、多分俺だよ。」

女戦士「そうなんですか！！！」

フッ……可愛い子に褒められるのも悪くないな……と、ウンウン頷いていたら……

女戦士「チームに入ってください！」

トシ「ウンウン……」

……以上の様な経過でチームに入ることが決まってしまった……

まぁいいかこの子可愛いし乳でかいし……

大丈夫かトシ……

一方神の領域では……

運命の女神「なんなのトシったら胸ばかり……みて……私も胸あるのに……」

運命の女神の目に光が無くなる

運命の女神「…そう死にたいの……そう……」

運命の女神も胸は大きいがいかせんトシはよく見てなかった……あの状況で見ろと言うのも無理があるが……

運命の女神「……そう……これは罰が必要ね……罰が……」

トシ大丈夫か……

ギルドカード
裏面
装備…紅桜
加護…運命の女神の加護→運命の女神の愛
New、加護?…運命の女神の愛憎

5話（後書き）

うーん、女神の名前決まらい……

6話（前書き）

ウン

6話

さてと巨乳女戦士ちゃんに誘われチームに入ったはいいが他のチームの子は大丈夫なの？

と誘われるまま、女戦士の本拠地にしている民家へ

少しボロいけど二階建てか……

女戦士「へへえ～すごいでしょ！！！家賃高いけど広いし優良物件だったんだよ！！」

確かにこれは優良物件だ……（胸を見ながら）

中に入るとボーイッシュな女の子とこれまた魔女っ子がいた。

女戦士「ね～カレンちゃん、ミ～ちゃん、チームに入る人連れてきたよ～。」

フム……ボーイッシュな子は胸は普通か……魔女っ子は……
……ゲフン！ゲフン！！！女戦士に勝るとも劣らない優良物件…
ゲフン！！！！さてと…

しかしあったばかりといえ俺は女戦士の名前も知らない……

そんな女についていく……大丈夫かトシ……

トシ「いや…まだチームに入るか決めて無いけど自己紹介はしないかい？」

女戦士「あっ！忘れてた～、あのね私の名前はリン！最近冒険者になったの一応前衛ね、よろしく！」

フム…きょにゅ…ゲフン！女戦士はリンというのか…けしから…ゲフン！

ボーイッシュ「ミシュラ…後衛…」

魔女っ子「私は…カレン…少し魔法使える…」

なんと2人とも口数すくなっ！

女戦士リンと足して割ったら丁度いいのに……

トシ「俺はトシ、昨日冒険者になったばかりだ。一応、多分前衛だ。」

リン「えへへ〜」

カレン「……」

ミシュラ「……ウン…」

大丈夫？

その後、俺の提案でまだチームを組むのは早いのではないか？明日一緒にクエストをして決めても遅く無いのでは無いかと話あった。

宿屋

トシ「ハァ～あのチーム大丈夫かな？」

女の子は全員可愛いかったけど…

まぁ明日は本当にゴブリン討伐クエストだな……

その前に……
この刀の扱い方……

普通に抜こうとする……抜けない……
この前はサクラと言ったら抜けたんだよな…

トシ「サクラ」
シャン！

抜けた…

しかし紅いな…綺麗だけど

しかしこの前の花びら？はどうしたら出るんだ？

宿屋の部屋で刀を振ってみたがでない……

謎だ……

結局いろいろ試したが花びらは出なかった…

こうして1日が終わった……

女戦士リン
ギルドカード
表面
筋力Ｅ－
耐久Ｅ－
俊敏Ｆ＋
魔力Ｆ－
幸運Ａ－（英雄クラス）
裏面
職業…戦士
装備…鉄の剣（ショートソード）
皮の鎧、皮の盾
加護…なし
スキル…ショット

6話（後書き）

うーん…女戦士のイメージはドラクエ３の女戦士…

スキルなどの説明は次話に

7話（前書き）

能力やスキルはフェイトからだいたいきている

7話

リモーネの街から南側の森

さて女戦士ことリンのチームに誘われ、一度相性確認といいますかチーム入る為の実力を見せる為に森にやってきた

トシ「そういえばここの森ではどんなモンスターが出るの？」

カレン「……」
ミシュラ「……」

えっ…無視……

リン「えっと～ゴブリンかな～」

リンちゃんいい子！

まぁ今日は実力確認だし別にいいが…

しかしリンは戦士の様な格好だな…

ガサガサ

……

おっとゴブリンだこんなにすぐ見つかるなんて今日は運がいい。

……リンの幸運補正です…

リン「じぁ私達がやって見せるね！」

と言いながら駆けていくリン
カレンはブツブツと魔法詠唱

ミシュラは……あれ？消えた？

ミシュラを探すため周りをキョロキョロ……？いない……

そんなことをしてるうちに戦闘が始まった……

リンは少し短い鉄の剣でゴブリン3匹を牽制してる、魔法詠唱の時間稼ぎか…

少しすると魔法詠唱が完了したのかゴブリン1匹が炎に包まれ命を落とす。

残り2匹…

あっ…もう1匹が矢に刺さって絶命。

残り1匹だ…

リン「ヨシ！じぁ～最近覚えたスキルだ～よ～」

ゴブリンから少し離れたところからリンが剣を普通に振り下ろしたら目に見える剣圧がゴブリンに当たり3回転した……

ヨロヨロと死にかけながら起き上がるゴブリンに無慈悲にサクッと矢が刺さる…

戦闘は何の苦戦も無く終了したのだった。

リン「ウ～ン…久しぶりにゴブリン倒したね～」

えっ戦い慣れてた感がしましたが？

リン「そう？だってゴブリン斬ると剣汚れるし～薬草採取のクエストが楽だよ～」

ミシュラ「…最近ずっと薬草…」

カレン「だから…盗賊もいなくなった…」

リン「え～そうなの～？」

2人コクコク

え～

まぁいなくなった人の話しは置いて

トシ「それよりリン、さっきの戦闘でゴブリン吹っ飛ばしたのなに？スキルって言ってたけど？」

リン「ウン！あれはね～ショットっていうの」

ショットね…しかし言葉足らずな子…おじさん心配！

カレン「…魔法と違って…スキルは…すぐ発動出来るのが多い…でも魔法より威力が少ない…のが多い…発動させるのには…技量と少しの魔力が必要……」

ミシュラ「さっきのは…魔力と剣圧を…混ぜて飛ばした用なもの…と考えればいい」

へへえ～奥が深いな

トシ「ところでリンはスキルどこで覚えたの？」

リン「ウン？ウ～ン……あっ！盗賊ちゃんに教えて貰ったの～」

大丈夫？この子？

トシ「じぁ俺にも教えて欲しいんだけど……ほら同じ剣を使う前衛だし魔力あんまり必要無いんでしょ？」

カレン「でも…魔力はあった方がいい…魔力があると…同じスキルを…何回も使えるし…同じスキルでも…注ぐ魔力を上げれば…威力も上がる…」

ほうなるほど。

リン「私は魔力が少ないからこのショットのスキルは1日3回しか出せないんだよ～」

トシ「それでも戦闘で役に立つなら教えてくれ！」

リン「いいよ～」

リンちゃんいい子！

…３０分後…

リン「凄～い！こんな早くできるなんて～」
リンに教わりなんとか魔力を剣に与え放出することが出来た。ちなみに自分の刀は使っていない、リンのショートソードが魔力を放出するのに適しているらしいのでリンの剣を借りて練習した

難しいと思ったら以外と簡単だった…

ちなみにカレンとミシュラは呆然としている覚えるのが早過ぎるらしい

そんな時にゴブリンが…

よ～しでは試しに俺の刀でやって見ますか！

ここで昨日、刀を振ったりして試したのだが言葉にサクラと出さな

くても心の中でサクラと呼びかければ刀は抜けると気がついた。

（…サクラ……）

キイン！

リン「わぁ～綺麗…」

カレン「…魔法剣？…」

ミシュラ「…綺麗……」

どうやらはじめて日本刀を見た外国人みたいだな…いやそれ以上か
この刀紅いし

そんなことより目の前の敵だな…

ゴブリンが5匹か…

しかしオーガの様な威圧感は無いな…

さてと数が多いから適当にスキルを放ちますかね…これなら当たるでしょ

トシ「いくぜ！フッ！！！」

リンの剣と同じ様に魔力を刀に注ぎ込んで刀を振り下ろすと同時に放出する！

！！！！！

ガガガガガッ

あれ？剣圧が沢山でた。

その剣圧がゴブリンを襲う……

ドッドッドッドッドッドッドッ

５匹のゴブリンに平均１０以上の剣圧が当たる。

カレン・ミシュラ「…えっ」

リン「うわ～凄い！こんなのはじめてみた！！盗賊ちゃんもこんなに出せないよ～」

ゴブリン達は無惨な死体となった……

あれ？力加減間違っちゃった？

リンは終始ニコニコ

そんなリンとは反対にカレンとミシュラは呆然としていた。

ギルドカード表面

ミシュラ
ギルドランクＦ
筋力Ｆ＋
耐久Ｆ＋
俊敏Ｅ＋
魔力Ｆ＋
幸運Ｆ＋
裏面
装備…普通の弓・普通の矢・普通のナイフ
加護…なし
スキル…気配遮断Ｄ－

7話（後書き）

ウ～ン

8話（前書き）

うーん会話が多い

8話

所は変わり神の領域

水晶を見つめる美しい少女が一人。

運命の女神「ふふ…ふふふふ…」

トシの浮気？現場を目撃し怒り狂う運命の女神。

そこに、一人の美しい来訪者が。

???「あんたまたやってんの？また人間に執着？この前は、源義経を異世界に飛ばして、結局ダメで最近は織田信長に執着！信長なんて異世界に送る前にダメにしちゃったじゃない！！！」

運命の女神「うるさい…お前に用は無い、それに今回の彼なら心配ないわ。あの刀にも気にいられてるようだしね。それに彼は私が、運命に干渉しなくても面白いわ。」

???「ウソっ！珍しい。あの刀がね～で、どこまで能力解放したのよ。」

美しき来訪者はその内容に少しビックリする。

運命の女神「まだ第一段階よ……それより罰よ。」

浮気の話になり運命の女神の目の光が無くなる。

???「罰？なにそれ？」

運命の女神「浮気よ浮気。」

？？？「浮気ね…またあんた暴走しないようにね。」

運命の女神「それよりなんの用？美の女神？」

美の女神「いや～ヒマでね～」

運命の女神「あなたにご執着の神がいたでしょ？彼の所に行ったら？」

美の女神「戦の神のこと？だって彼ウザイし、むさ苦しいわよ。」

哀れ戦の神！！！！

美の女神「それにあなたがご執着の彼も気なるし。」

運命の女神「邪魔だけしないでね。」

美の女神「わかってるって！」

運命の女神は答えに満足したのか、またトシの映っている水晶に目を向けた。

8話（後書き）

うーん

9話（前書き）

ゴブリンさんのお話

9話

ゴブリン

彼らはその驚異的な繁殖力、適応力でこの大陸のどこにいても見かけることができる。

しかし個々の能力は高くなかった。

連携して敵と戦う知能もなかった。

ゴブリンの進化先のハイゴブリンになれる者も少なく。

ゴブリンの王ゴブリンロード、また別な進化先のオーガになれる者は一体何千匹のゴブリンの犠牲の上にたっているのか……想像もつかない。

しかし、そのオーガ又は、ゴブリンロードでさえ優秀な人間やエルフ、獣人達に狩られる始末。

このリモーネの南の森に生息するゴブリンの彼もまた、狩られる側の一匹であった。

しかし彼は他のゴブリンと違った。いや、違うと言うのは言い過ぎか……何も無ければ彼はこのまま、生きても狩られる側のままだった。

そう、彼は機会に恵まれたのである。

狩られる側から、同胞たちの憎き仇……冒険者と呼ばれる者たちを狩る側に……

それは彼からすれば突然のことだったのだろう…

声が聴こえた。

「力が欲しいか？全てをねじ伏せる。絶対王者の力が。」

彼は頷いた。このままでは冒険者に狩られて死ぬだけだ。そんなの嫌だと。

「ならば、くれてやろう。絶対王者の力を」

声と同時に自分の体に力がみなぎって来るのを感じ、進化がはじまった。

その進化はハイゴブリンを通り越し、

彼をオーガに変えた。

ただのオーガではなかった……

一流と呼ばれる冒険者ですら彼と会えば死を覚悟するか、守りたい人達の為この赤い悪魔と相討ち覚悟で望まなければならない…

赤き肌、オーガより一回り大きな体。

オーガ〈希少種〉に

オーガ又はオーガ〈亜種〉でさえその凶暴性で危険視されるが、希少種はその比では無い。
凶暴性だけでは無い、オーガは、通常堅い筋肉の鎧に守られているが、所詮は筋肉。
剣で斬れば傷つくし、強い攻撃を急所に受ければ死にもする。

しかし希少種になると次元が違う。

並みの攻撃では、傷すら付けることがかなわない。
魔法で弱らせ、そこに強力な一撃を何度も与えて、はじめて致命傷を与えられる。
筋肉の鎧が厚いということは、その攻撃も一撃、一撃が悪夢そのものだ。

優れた魔法使い、強力な一撃を何度も与えることができる戦士、魔法使いを守る為オーガ〈希少種〉の攻撃に耐え抜く盾役が必要になるだろ。

そのオーガ〈希少種〉に2人で、しかもどちらも魔法が使えない者

が立ち向かうと、他の冒険者が聞いたら皆が皆こう答えるだろ。

無理だ、どこの国のおとぎ話かと…

9話（後書き）

うーん

１０話（前書き）

難産でした

10話

神の領域

そこには2人の美しい女神達が、進化を遂げたオーガ〈希少種〉を、水晶でじっと見ていた。

美の女神「あんたやり過ぎ…異世界に飛ばされてすぐに、この敵の強さはまずいでしょ」

運命の女神「ふぅ…邪魔をしないって、先言ったばかりでしょ」
ギロリと音がしそうなほど目を向ける女神

美の女神「いや〜でもやりすぎよ。あんなに強化しちゃって」

運命の女神「彼なら大丈夫…最初は怒って強くし過ぎちゃったけど…

でも大丈夫よ、彼は運命を切り開く才能があるもの。」

美の女神「あんたね〜何回目よそうやって酷い試練を人に与えて、
ダメにしちゃうの。」

運命の女神「一応言って置くけど、私は彼に試練を与えるのは、これがはじめてよ。異世界に行く前から気になってたけど、異世界に飛ばして試練を与える程、気に入ってなかったもの、彼は自分の力で神の領域に入り、そして異世界に行ったのよ。後ね、行く前から度々不幸と言う名の試練も、自分から向かって、乗り越えてるもの。」

美の女神「うげっ！なにそれ！！！規格外過ぎ！」

そう規格外なのだ運命の女神からのいたずらで試練を与えられる人間は数多い。しかし、自ら運命を変える人間はほんの一握り…しかも神の領域に達するなど前代未聞だ。

運命の女神「そう…だからね、彼は面白いの…あぁ早く強くなって私の元に戻ってこないかしら…」

クネクネと体を動かす運命の女神…

美の女神「……。」

その様子を見て美の女神は呆れて黙ってしまったのだった。

所変わりリモーネの街

トシ達はゴブリンを狩ったあと更に数匹のゴブリンを狩り、街に引

き上げてきた。

トシ「換金終わったよ。」
トシは換金を受付で済ませて、リン達の居る酒場にやってきた。

リン「ありがと～ほらトシも食事しよ～」

リンに促され席に着き、食事をはじめる。

トシ「ところで、チームに俺が入る話はどうなったのかな？」

そもそも、今回の狩りはトシの実力をリン達の3人にわかって貰い、チームに入る為のものだ。

リン「チームに入ってくれるの？なら私達は問題無いよ！」

どうやらリン達は俺を認めてくれたらしい。

トシ「では改めて、よろしくお願いするよ。」

リン「やった！じゃあ今日はお祝いだね！うーんあとチームの名前も決めようよ～」

トシ「チームの名前？」

リン「うん！名前。別に決めなくても大丈夫なんだけど、他のチームはどこも名前を決めてるの。」

名前ね…

トシ「へぇ～例えばどんな名前があるの？」

リン「うーん、例えばね、この街で一番強いチームは、烈火の剣ってチーム名だよ！凄い強いチームなんだよ！かっこいいな～私達もかっこいい名前にしようよ～」

烈火の剣だと…！

中二過ぎる…恥ずかしいからやめて～

こうして楽しい夜は過ぎていくのだった…

翌日に、そのチーム烈火の剣が行方不明のチームを捜索する為に、
南の森に行き行方不明になることも知らずに…

１０話（後書き）

うぁ〜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0161z/

紅き伝説

2011年12月14日21時46分発行